

新スポーツの 「聖地」

「子供の遊び」をスポーツに変えた「昭和新年国際雪合戦大会」は誕生してわずか14年だが、人口3300人弱の町から生まれて国内はもとよりフィンランドなど海外6カ国で「YUKIGASEN」が開かれるまでに育った。胆振管内壮瞥町は新たなスポーツの「聖地」になった。

「冬場に観光客を呼べる手はないか」。87年夏、商工会や農協の青年部、若手経営者など6、7人の会合が始まりだった。「さっぽろ雪まつり」に負けないイベントを求めた若者たちが3カ月の議論の末に行き着いたアイデアが「雪合戦」。反対もあったが、雪玉をぶつけ合うという単純さが妙な自信につながった。

一方で「決してローカルイベントには終わらせない」とも決意。その思いが、雪合戦を「本格的なウィンタースポーツ」に変えた。厳格な競技ルールを決め、大々的にPR。89年2月の第1回大会は、70の募集枠に約120チームが殺到する上々の滑り出しになった。

私と遺産

雪合戦を五輪種目に

「国際雪合戦大会」の魅力に、競技として確立された点を挙げる人は多い。町内約1500人の審判の頂点に立つ「A級審判」の阿野光弘さん(46)は「冬のスポーツとして認められたいと思ってきた成果」と胸を張る。

試合は、ジャッジが大きな要素を占める。「ジャッジの8割は、雪玉に当たったかどうか」だが、熱くなつた選手が「当たったのにアウトになっていない」と猛抗議することもある。雪玉の尽きた選手が、つい玉を作ることもあり「アウトを告げると『エッ、作ったっけ?』と我に返る人も多い」と苦笑する。

「壁同士のわずかなすき間を抜いて雪玉を当てるとか、年々すごいプレーが出てくるね」と感心する半面、気軽に楽しむにはスポーツ化しすぎた点も認める。「今後は『冬に壮瞥に来れば、いつでも雪合戦ができる』というような態勢を作りたい」と意欲を燃やす。

大会には選手や審判、会場準備などで全町民の2割近い約600人が携わる。山中漠(きよし)町長は「雪合戦を通じて産業や地域の垣根が取り払われ、人間関係の新陳代謝が進んだ。町民が得たものは大きい」と語る。

しかし、経済効果が期待ほどでないのも現実。